

## 国際社会で発信する能力の育成(5)

—効果的な教材開発を目指して—

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

多尾奈央子・秋元 佐恵・須田 智之  
高橋 深美・八宮 孝夫・平原 麻子  
山田 忠弘

## 国際社会で発信する能力の育成(5)

—効果的な教材開発を目指して—

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

多尾奈央子・秋元 佐恵・須田 智之  
高橋 深美・八宮 孝夫・平原 麻子  
山田 忠弘

### 要約

2007年度からの研究テーマ「国際社会で発信する能力の育成」における5年目の取り組みの概要を振り返る。

本校でも海外生徒との交流の場が広がっており、生徒たちは自身の英語コミュニケーション能力を試される機会が多くなってきた。その機会は昨年よりさらに増えている。どのように生徒たちの意識を高め「発信力」の育成に努めているかを、各学年における取り組みを中心に報告する。また、最後に英語科として「国際交流を支援する取り組み」についても述べる。

キーワード：発信、基礎期、実践期、発展期、教材、国際交流の支援

### 1 はじめに

#### 1.1 英語科の授業構成

本校英語科は中高6ヵ年一貫教育の指導課程として、生徒の発達段階に応じ、6年間を基礎期[中1・中2]・実践期[中3、高1]・発展期[高2・高3]という3つの段階に分けて位置づけ指導にあたっている。

授業構成は以下のとおりである：

中学1年生～中学3年生

「英語」4時間(LL・TT各1時間を含む)

高1 「英語Ⅰ」3時間+「OCⅠ」2時間

高2 「英語Ⅱ」4時間(TT 1時間を含む)

高3 「リーディング」3時間(選択)

「ライティング」2時間(選択)

決して多いとはいえない授業時間数であるが、これを上記の3段階に位置づけて指導するわけである。なお、3段階のシラバスについては『筑波大学附属駒場論集』(以下『論集』)第49集(2010)を参照のこと。

#### 1.2 英語科の取り組みの指標

2010年度以降における本校の学校教育目標は「本校の教育目標である『自由闊達の校風のもと、挑戦し、創造し、貢献する生き方をめざす』の理念のもと、生徒自らが学ぶ態度の涵養に努め、将来を担う社会のトップリーダーとして活躍できる能力と意欲を身に付け

させる」となっている。このことと関連して、この3年間継続して、校内国際交流プロジェクト委員会では「トップリーダー形成の一助として国際感覚を涵養するためのプログラム開発・研究を行い、将来国際貢献できる人材の育成を図る」という目標を掲げており、英語科としてもそういった学校目標に積極的にかかわるべき立場にある。

そこで、まず本校が国際社会に触れる機会について述べ、次にこの1年間の英語科の取り組みを振り返る。最後に、国際交流に当たって、英語科でどのように支援したかを報告する。

### 2 本校生徒が国際社会に触れる機会

#### 2.1 はじめに

本校は平成14年度よりスーパーサイエンスハイスクール(SSH)に指定され研究活動を行っている。また昨年度より筑波大学はその附属学校に対して「先導的教育拠点」「教師教育拠点」「国際教育拠点」の3拠点構想を実現するよう求めており、その影響もあってこの数年で、本校生徒が学校教育活動とかわかって国際社会を実感する機会が確実に増えてきた。

2011年度の国際交流関係の活動事例を以下にあげる(昨年度までの事例は『論集』第50集(2011))。

## 2.2 2011年度の国際交流

今年度は、立命館高校および横浜サイエンス・フロンティア高校(ysf)のコア SSH プログラムとの提携により、両校の海外交流に合流参加することになった。また、東芝主催の「地球未来会議」という交流プログラムに参加できることになり、結果として国際交流の機会が昨年度までより増えている。

<SSH 関係>

- a. 韓国サイエンス・アカデミー(KSA)とのシンクロトン実験 (立命館高校)
- b. NUS(National University of Singapore)1週間研修
- c. 英語による口頭・ポスター発表 (ysf)
- d. 英語による口頭・ポスター発表 (立命館高校)
- e. 台中一中訪問 (授業参加、英語による発表)
- f. 米国トーマス・ジェファーソン高校サイエンス研修 (英語による発表、NASA・博物館見学)
- g. KSA1週間研修 (韓国)

<それ以外のもの>

- h. 東芝地球未来会議 (タイにて環境問題について英語で討論)
- i. ユネスコアジア文化センター(ACCU)による中国職員招聘プログラムによる本校授業参観・意見交換 (中国語による)
- j. ジャパン・リターン・プログラム(JRP)による外交官との交流会 (日本語による)
- k. 筑波大学教員研修留学生との交流 (本校の音楽祭や文化祭に招待し、個人レベルで交流する)

このような多彩な機会を通じて、生徒は自分がいかに英語でのコミュニケーションができないかに気づかされる。教員はこういった彼らの気づきを大切にし、また、生徒が「この授業をきちんと受ければ力がつく」と実感し食いついてくるようなものを工夫していかななくてはならぬであろう。

こういった意識を持ちながら今年度の各学年ではどのような指導を行ったかについて以下に報告する。

## 3 各学年における取り組み

### 3.1 中学1年生 (65期) 担当：八宮孝夫

#### 3.1.1 はじめに (基礎期のスタート)

今年度から、小学校にも英語が正式に導入された。現中学1年生も、その導入の直前の学年とはいえ、小

学校で英語を学んだ比率が高いのではないかと思い、初回にアンケートを取ってみた。その結果は補足資料1の通りであるが、果たして、英語学習経験のある生徒の比率が以前より高かった。

文科省から配布された『英語ノート』を使用したという回答も多く、早速、その内容を調べてみると<曜日、月名、天気、数字、時刻、教科名、スポーツ、食べ物>などは絵と音声によってかなり導入されていた。文法についても、1人称と2人称に限って言えば、I want to ...など中2の文法項目まで含んでいた。ただし、あくまで絵と音声による導入であって、文字としての定着はこれからのことであった。

以上のことを踏まえ、小学校で導入されたと思われる項目を復習しつつ、それに文字を対応させていく、という形を取った。もちろん、全生徒が学習してきたわけではないので、その生徒が不利にならないよう心がけた。

なお、<基礎期>のスピーキング・シラバスは以下の通りである：

- ・ 個々の発音・連音・リズム・イントネーションの基本
- ・ つづりと発音の関係 (フォニックス)
- ・ 絵やものをヒントにした oral reproduction (show & tell, story telling)
- ・ 身近な事柄を英語で説明 (自己紹介など)

以下、通常授業2時間およびTTの1時間の実践を担当の八宮が報告し、その後LL担当の須田の実践を述べる。

#### 3.1.2 1学期の授業

1学期は、be動詞を中心に here/there の位置関係、this/that の区別、日本語に存在しない冠詞 a(an)/the の意味、単数と複数、3人称を含む人称代名詞などを扱い、最後に has/have を導入した。

This is ... / That is ... などは、実物提示をしながら導入するのに便利な表現であり、これを用いて、上記の曜日、月名などを導入した。カレンダーを用いて指し示しながら英語を言うことで日本語を介さずに容易に導入することが出来る。中学1年生の初めから、このように一種のプレゼンテーションのようなスタイル (一般に Oral Introduction と呼ばれる) で教材を導入するのである。

また、副教材としてNHKラジオの『基礎英語1』を聞くように指示し、実際に時折授業で利用をした。ただし、授業の進捗と『基礎英語1』の進捗は必ずし

も一致しないので、自分なりにアレンジした形で利用したのである。

1 学期末には、ALT の協力を得て、全生徒に対して英語によるインタビューを行った。「自分の名前、年齢、天気、日にち、好きな教科など 1 学期に学習したことについて質問するので、口頭で答えること」という指示を事前に出しておき、出席番号順に行った。最初は ALT のみがインタビューをし、その間、筆者はノートチェックを行うと役割分担をしていたが、予定より時間がかかってしまったため、2 日目は筆者と AET とで分担してインタビューを行った。1 対 1 で 1 学期に学んだことを使いながらコミュニケーションを図るという体験をさせるのはいいことだと思ったが、事前に準備できる項目が多かったので、もう少し、その場で考えて答えるような項目を増やすべきだと反省した。

もう一つ、口答試験（パフォーマンス・テストと称する）として授業で扱った『基礎英語 1』の内容をプレゼンテーションすることを課した（→使用したイラストと発表内容は補足資料 2 参照）。

番組に登場する Taro と Doc や、関連する絵を黒板に貼り、1) それを指し、2) 視線を聴衆に向け、3) 適切な音量・リズムで発表する、ことを指示した。

これらの絵は授業で実際に貼って、筆者が Oral Introduction をし、立ち位置まで注意をした上で行ったものである。

1 年の 1 学期の最後としてはかなりの分量の発表であるが、概ね、よく発表できた。このような課題によって、〈基礎期〉の目標である、自己紹介と Oral reproduction が、最小限の形ではあるが可能になるのである。

### 3.1.3 2 学期の授業

2 学期は本格的に動詞を導入した。まず、現在進行形、過去進行形、そして過去形へと進んだ。肝心の現在形はまだ正式に導入されていないが、この指導順については八宮(2011)を参照されたい。端的に言えば、目の前で起こっていることを示す現在進行形が、最も英語で導入しやすいということである。

簡単に、使用教材を挙げておく。

#### 1) Taro and the Mermaid

\*The Mermaid is playing the harp now.

\*Taro and Doc are listening to the music.

→『基礎英語 1』の改変版。

#### 2) The Youth Conference in Thailand

\*Kazu and Kohei had a conference in Thailand.

\*They were talking about the environment problems.

\*The girl was milking a cow at that time.

→これは、今夏に高校 2 年生がタイの国際会議に参加したことを教材化したもの。筆者も引率者として参加したので、先輩が英語でプレゼンテーションしたことなども伝え、実際にその音声を聞かせた。

#### 3) 芸術家たち

\*Kawabata Yasunari wrote *Snow Country*.

\*Beethoven composed *For Elise*.

\*Edison invented an electric lamp.

→1994 年度版『基礎英語 1』より過去形の導入に用いる。

#### 4) *The Tale of Peter Rabbit*

\*Peter went to the garden.

\*He ate some lettuces and radishes.

\*He saw the gate beyond Mr. McGregor.

→『ピーターラビットのお話』を易しく書き換えたもの。多数の挿絵により、理解を助ける。

過去形のバリエーションを増やす。

どの教材も絵を貼りながら Oral Introduction により導入し、本文の解説・音読を行った後、導入で用いた絵とその再現(reproduction)のヒントになる questions などを付したプリントを配布した。毎回再現まで行ったわけではないが、ティーム・ティーチングなどの時間に発表練習を行うようにした。

上のようなことを踏まえて、2 学期のパフォーマンステストは次のように指示した：

「芸術家たち」のプリントで扱った\*パタンに習って自分の好きな作家や音楽家について、

What is this?

Who wrote [painted / composed / invented など] it? ○○ ~ it.

When did he[she] ~ it?

He [She] ~ it in (year).

+アルファ（一言ウンチク、感想、など）

でまとめ、発表する。

\*このパタンの具体例を示さないとわかりにくいので一例を挙げる。

What is this? It is *Sunflowers*.

Who painted it? Van Gogh painted it.

When did he paint it?

He painted it in 1888.

Did he paint a lot of paintings?

Yes, *Sunflowers* is one of them.

つまり、一人語りで聴衆に語りかける。質問はあくまでも、聴衆を引き付けるためのもので、自問自答と考えてよい。このような、聴衆に質問しながらプレゼンテーションする手法はよくあるもので、中学1年のうちから慣れておくほうが有益である。

### 3.1.4 パフォーマンス・テストの実際

パターンに従って発表するとはいっても、1学期と違い、自分で創作する初めての発表なので、ティーム・ティーチングの時間に一応下書き原稿をチェックし、また、前に出て発表する練習もさせた。

発表当日は、発表するもの(本など)とその作者の絵の拡大コピーを用意するように指示した。

実際の発表は、プラス・アルファの部分で凝りすぎる傾向があった。もっとシンプルな課題にすべきだった。

作品例を1つ挙げる。

This is an “iPod.”

Who invented it? Steve Jobs invented it.

When did he invent it?

He invented it in 2001.

Did he invent a lot of things?

Yes, he did. “iPod” is one of them.

“iPod” is very useful.

(1-A, HT)

実際に行ってみると、絵を貼ったり数字を書いたりするタイミングと発表するタイミングがうまくいかない場合も見られたが、実際に前に出てプレゼンテーションする経験を積むということが大切なのではないかと思われる。この課題により、パターンにはめてのものではあるが、生徒のオリジナルの show and tell を行うことが出来た。

### 3.1.5 LLでの取り組み (担当: 須田智之)

中学1年生では、週に1度LL教室での授業があり、リスニング・スピーキング力の向上を図っている。

4月からの入門期においては、『「くちぐせ音ペン」用DVD』(地球人村)を観ながら、英単語や短いセンテンスのリスニングと発音練習を行った。2学期からは *Listen First* (Oxford 大学出版) を使用し、リスニング力向上を図っている。

また、楽しみながら英語を学ばせようと歌と映画を扱っている。1学期には Jazz Chants や映画 *The*

*Sound of Music* より “Do-Re-Mi”、“Edelweiss” の2曲を、2学期はアニメ『となりのトトロ』を英語音声で観賞すると共に、“Sampo”、“My Neighbor Totoro” の2曲を歌えるように練習した。

### 3.1.6 今後の課題

はじめに述べたように、小学校時代に英語に触れた生徒が圧倒的に多いという状況だったが、そうでない生徒のことも鑑み、ほぼ従来通りのペースで1、2学期行ってきた。しかし、振り返ると、もう少し、小学校でやったことを生かして出来たのではないかという感じもする。3学期は現在形も導入しすべての時制がそろい、表現できる幅も増えてくるので、またそれに見合った課題を考えたい。

## 3.2 中学2年生(64期) 担当: 平原麻子

### 3.2.1 はじめに(基礎期から実践期へ向けて)

中学2年生は基礎期の後半にあたり、英語らしい音声が入らずにつ身についてきたところである。語彙数も身の回りに関する表現を中心にかなり増えてきている。中2の2学期ごろからは、他動詞性の高い英語の論理を意識させ、自分の気持ちを述べるだけでなく、意見を表明したり議論を展開するための初歩的な指導を開始する。

今年度をスタートするにあたって、生徒たちには中学2年生の目標として、1) 英語らしい音声の基礎完成、2) 英語を使って他人と意見や感想を分かち合う、3) 英語の発想により慣れる、という3点を掲げた。授業時数は週4時間で、①教科書中心の授業(2時間) + ②日本人教師とネイティブ教師によるティームティーチングの授業(1時間) + ③LL教室での授業(1時間)、となっている。①では主に文法事項の導入・語彙の強化・音声の訓練、②では①で学んだことを実際に使いながらのコミュニケーション力の向上、③ではリスニング力の強化を中心とした授業を行う。

### 3.2.2 具体的な取り組み

#### 3.2.2.1 教科書中心の授業(週2時間)

##### ①授業の枠組み

使用教科書は *New Crown English Series* (三省堂) である。TT と LL を含めて週4時間の授業では英語に触れる時間が圧倒的に足りないため、生徒にはNHK 語学番組(『基礎英語2』『英語5分間トレーニング』など)の視聴を推奨している。

また、授業内での文法指導は、実際の使用場面と結

び付けての口頭ドリル中心であるため、いわゆる問題演習に時間をさくことはできない。その部分は共通の文法問題集（今年度は『新 A クラス 中学英語問題集 2』昇龍堂）を全員に持たせ、家庭学習でカバーしている。定期考査では問題集の内容も出題範囲に含めている。

教科書各課を扱う場合は必ず音声から導入するよう心がけ、教科書を開くのは最後の 10 分間である。その 10 分間では、repeating・chorus reading・individual reading・read & look up など様々な音読技術を使い、理解した内容を音声にのせて伝える訓練をしている。

## ②音声指導

前項で教科書に内容に関する音読練習について触れたが、その他、1 学期には副教材として、英語らしい音声の定着のために『ゼロからスタート英語発音猛特訓』（J リサーチ出版）を全員に購入させ、発音記号を習得しつつ、ボトムアップの発音訓練を毎時間継続的に行った。発音記号の指導は、自分で辞書をひいた時、それを見ながら発音できるようにするためである。加えて、チャンツや英語の歌も頻繁に授業で取り上げ、楽しみながら音声に親しむことができるよう工夫している。

生徒に英語のリズムを体得させるためにはチャンツが大変有効である。64 期生は中 1 の頃から『チャンツでノリノリ英語楽習』（NHK 出版）などを利用し練習を続けてきたが、中 2 ではやや長めのチャンツを練習したあと、その一部を自分の言葉に変えてオリジナルチャンツを作る試みも導入した。発表時には生徒同士、お互いの創作をおおいに楽しんでいる。

英語の歌は基本的に毎月 1 曲ずつ、直近で学んだ文法事項が歌詞に登場したり季節感が感じられる、または生徒が親近感を覚えるようなものを中心に選び、練習している。今年度は次のような歌を取り上げた（11 月現在）。

“Sing”、“Stand by Me”、“Singing in the Rain”、“Top of the World”、“We Will Rock You”、“Octopus’s Garden”、“Circle of Life”、“Can You Hear the Love Tonight”。

最後の 2 曲は、ディズニー映画 *Lion King* の視聴と関連させて練習した。

## ③長期休暇中の課題

夏休みの課題として *Incredible Earth* (CD 付き : Oxford Read and Discover Series) を読ませた。この本の最後には ‘Make a poster. Write sentences to

describe the incredible place.’ というプロジェクト課題がついており、意欲的な生徒は写真やイラスト付きの立派なポスターを作成し提出してくれた。その中から一例を紹介する(補足資料 3)。文章には文法的な誤りもあるが、ビジュアルでも効果的なポスターを作ろうという工夫が見られ、プレゼンテーション能力の高さがうかがわれる。

また夏休み明けには、本の内容に関する確認小テストおよび音読テスト (TT 授業時) を行った。冬休みにも同じようなコンセプトの課題を出す予定である。

### 3.2.2.2 TT 授業 (週 1 時間)

今年度はニュージーランド出身の ALT をお迎えしているが、中 2 教科書の第 1 課でオーストラリア英語が取り上げられており、World Englishes の生きた見本となっていた。

TT の時間では、教科書中心の時間に学んだ文法事項を、日常的な場面で実際に使ってみる練習を軸にして授業を進める。よって、モデルとなる対話をペアワークやグループワークで繰り返しつつ習熟を図り、最後は全体の前で発表する形式が主である。次に対話練習の 1 例をあげる。

<最上級の練習で>

A: What is the most interesting subject for you?

B: Science is the most interesting subject for me. I like experiments and I want to be a scientist in future. How about you?

A: P.E. is the most interesting subject for me. I like playing sports. Especially playing soccer is a lot of fun.

また、中 1 では日常的な話題を扱い、自分の気持ちや感想を述べるのが中心だったが、中 2 になってからは意見を言う練習や、因果関係を意識させる取り組みを始めている。

英語は他動詞性の高い言語で、Why—Because を常に意識していなくてはならない。これは日本人が苦手とする部分である。ALT には生徒のちょっとした発言に対しても、頻繁に“WHY?”と突っ込みを入れてくれるよう頼んである。生徒たちは最初のうちは大変いやがっていたが、次第に慣れてきたようで、今ではお互い同士の発話や教師の指示に対してまでも、彼らから“Why?”と突っ込んでくるようになった。

このほか、学期末にはパフォーマンステストを行っ

て評価の大きな柱としている。1 学期は未来を表す表現を学んだあとで、“Me in 20 Years”というテーマで20年後の自分について語らせた。2 学期には「A と B を比較して、A の方がより〜である」ということを聴衆に説得するスピーチを行う。単なる感想ではなく、聴衆が納得するような理由をきちんとあげるよう指示している。

スピーチの指導では、Speak loudly, clearly, logically. Have eye contact. Good posture. Effective props. の4点を強調している。また、聴衆が知らないような難しい単語を使う場合は、その単語と日本語の意味を書いた単語カードを必ず用意し、黒板に貼ったうえでスピーチをさせている。

### 3.2.2.3 LL での授業（週1時間）

本校では中学校3年間のLL指導で *Listen First* および *Basic Tactics for Listening* (いずれもオックスフォード大学出版) をコースブックとして使用し、適宜映画等の生教材を投入しながらリスニング力の強化に努めている。今年度はベテランの講師の先生におまかせしており、例年どおりの指導をいただいている。

## 3.3 中学3年生（63期） 担当：多尾奈央子

### 3.3.1 はじめに（実践期のスタート）

6年間のシラバスの中で「実践期1年目」として過去2年間で得た基礎知識を実践力として場に応じて使用できるよう input / output 両方において場面設定を現実味のあるものにすることに重点を置いた。

本学年では筆者が JTE 単独の授業（2単位）+TT 授業（1単位）+LL 授業（1単位）を担当している。教材は、単独授業では三省堂の *New Crown English Series 3* を基本に各課の題材について少し発展的な読み物に加え、TT では数種の ELT 書籍から 150~200 語程度の平易な英文や *Side by Side* (Pearson Education) からは input/output 時に補助となる視覚情報等を得て独自に作成した教材を使用している。LL では昨年度から引き続き、*Developing Tactics for Listening* (Oxford) を使用している。

現在完了形・後置修飾・関係代名詞等、中学3年生で扱う大きな文法を種々の演習問題が解けるまでの単なる知識として終わらせず、「知っていることを必要な時と場合に運用することができる」力をつけるための学習を授業内外で行うことがいかに大切かを理解させ、それを実践することを指導の最重要目標とした。具体的な内容は以下に述べる。

## 3.3.2 具体的な取り組み

### 3.3.2.1 JTE による授業（LL 含む）

以下に上述の目標到達のために日々の授業で留意した点を挙げる。

#### ① 読み

パターン化された演習問題や和訳問題を得意とする生徒達であるが、「行間を読む」「文脈の流れを汲んで文意を捉える」ことは不得手であることから、「読む」ことは単なる和訳、つまり記号の置き換え作業ではないことを理解させることに重点を置いた。EFL の書く英文はどうしても和文英訳どまり（記号の置き換えに終始するため）で、このことは結局 output にも影響するため、input での学習時に理解させることとした。そこで、教科書扱われている題材が発展しているもの、authentic なものを、生徒たち自身の日常と関連づいた教材を作ることを留意した。触れた英文が他人事ではなく、自身に何か接点があることで持つ印象は大いに違う。以下に1・2 学期で扱った読み教材を挙げる。さらに、「読み」においては、音声面での反復練習を徹底し、発音やアクセントについてはうるさく指導した。（repeating, chorus reading, read and look up, gapped read-and-lookup, summarizing, reporting）。

・ Tongue-cut Sparrow

・ Ruby Nell

・ Kevin Carter

#### ② 語彙（多義性）

ある語について、既知の語義を持つ場合、生徒達はその情報から何とか言葉を置き換えて文意を捉えようとするが、思い通りに運ばないことが増えたと実感している。それは英語の多義性を踏まえていないからである。語の意味を知っているという思い込みをなくし、文脈の流れを汲んだ語義が探索できるようになれば、英文を書く際にも使用品詞の幅は広がり、receiver にとっても文意を取りやすいものが表現できるはずである。この中で、低レベル語で高頻度語ほど一般に使用される場面が多いことも実際に表現させながら指導した。穴埋めや書き換えなどの演習問題は避け、動詞あるいは名詞だけを与えてある状況での英文を複数に表現で発表させている。多義性を活用すればとても多くの表現パターンが生まれることを学修してほしい。

#### ③ 音声（LL 授業）

総合的な発表能力を培うべく LL の授業では設備を利用して以下のスキルの習得を特に意識している。

①まとまった量のリスニングでも概要を捉えられる。

②語レベルから文レベルでの起こる単語個々の音の変

化に気づくことができる。

③ (音が変化しても) 正確に書き取る (再現する) ことができる

特に②③については、なかなか聞き取れない語があっても、音声情報以外に文全体を捉えて、あるいは文脈の流れから既知の文法知識を駆使すれば対応できる。自分の文法力を客観的に評価できる場面としても役立つ。

### 3.3.2.2 ALT とのティームティーチング授業

昨年度までは以下の流れで授業を組み立てていた。

- ① どういった場面で発話されるかを提示
- ② 具体的な英語での表現を紹介
- ③ パターン練習
- ④ 当該言語材料で自由に skit 等を作って発表

上記の通り、単独授業での新たな文法事項の導入において自分たちで自由な状況を設定してペアで発話練習した内容を発表する活動を多く授業に組み込んできたが、本年度は生徒が日常においてよく出会い、極めて現実に近い場面を設定し、そこである課題を解決するためにどのような表現で応答することができるか、とこれまで学習した知識を引き出すことを必要とすることに重点を置いた。与えられた言語材料を練習するのではなく、まずはどのような内容をどの表現で発話することがその場面では必要なかを考えることから生徒の学習活動が始まることに留意した。この活動で、生徒はうまい言い回しを何とか捻出しようと熱心に考える姿を多く見せ、また他人の応答に対して「いい表現だ」「それ会話がかみ合わない応答だよ」などと互いに評価している姿 (始めは求めていなかったが) も自然と見られた。

### 3.3.2.3 テーマ学習 (年6回・土曜日)

Scientific Research & English というテーマ名で、参加している日本学術振興会のサイエンス・ダイアログというプログラムから派遣された、日本の大学で最先端の科学を研究している外国人研究者 (1 回に 1 人ずつ、年間で 5 人) に英語で講義をしてもらうというものである。

毎回それぞれ講師の専門分野や国籍が異なるため、専門的で難しい科学の話だけでなく、自分の出身国や文化、自分の研究に使う基礎的な科学、そして、現在の自分の研究についてなどを英語 (ただし英語が母国語ではない場合が多い) で、話をしてもらい、その後、英語での質疑応答を行っている。ほぼ全ての講義でパ

ワーポイントが使用されるので、スライドで使用されている、あるいは講義で使用される専門用語などは事前に資料をいただき、語彙集 (glossary) を作成し配布している。

受講生が中学 3 年生であることを念頭に講師は講義内容やスタイルを考えてくださり、自分が研究に使っている実物 (サンゴ、炭素結晶など) を持参し、目の前で実際に実験をしたり、触れさせてくれる場合もあるが、これが大いに生徒の興味関心を引いている。

2 学期までのテーマと講師は以下の通りである。

- 第 1 回 Nanotechnology in Cancer Treatment  
(Dr. Mathew Kallumadil)
- 第 2 回 Coral (Dr. Christelle Aurelie NOT)
- 第 3 回 Polysaccharides from Seaweeds  
(Dr. Rando Tuvikene)
- 第 4 回 Neurosurgery (Dr. Mikhail Chernov)

(第 5 回、第 6 回については未定)

実際に行われている最先端の科学研究を知ることが出来るだけでなく、世界の様々な国の文化や様々な種類の英語に触れる非常に良い機会となっている。また、日本に興味がある若手の研究者たちは生徒に対してフレンドリーに接してくれており、将来の科学への興味、英語を学ぶ必要性などを普段とは違った角度から感じることが出来る活動であると言える。

また、複数の講義をただ受動的に参加する場とするのではなく、受講生徒は各自興味関心のあるテーマ (研究テーマ) を選択し、講義いただく講師の先生方の presentation 方法を参考にして 3 学期に発表 (ポスター製作・ppt 等) をする予定である。年間の回数としては少ないが、output の場としてはとても貴重な時間である。以下は生徒が選択した発表テーマである。

- ① カンブリア大爆発
- ② producing of oxygen
- ③ ろ過
- ④ カイロと瞬間冷却剤
- ⑤ 毛細管現象
- ⑥ 野球の変化球と流体力学
- ⑦ 真菌と細菌

### 3.3.3 今後の課題

「国際社会で発信する能力の育成」をめざし、中学 3 年次で扱う単元・言語材料と生徒たちの日常に自然な接点を見出し、2 年次までの基礎力を基に発信能力を涵養することに集中したが、来学期は更に SSH として科学的内容を間接的・直接的に使用して、「科学」

の場での input / output が双方にできるようになるものを学習材料として扱うことを考えている。

### 3.4 高校1年生(62期) 担当: 山田忠弘

#### 3.4.1 はじめに(実践期から発展期に向けて)

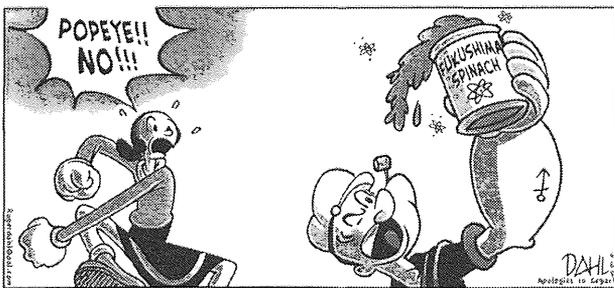
高校1年生の英語は、英語 I (3時間) とオーラルコミュニケーション (2時間) から成っており、前者は Reading と Writing、後者は Listening と Speaking と大まかに分けられる。自分の担当する英語 I では、Reading は分量に応じたスピードで大意をつかむこと、Writing は自分のレベルに応じた正確な英語で、描写や意見を表すことを毎回の授業での目標としている。

#### 3.4.2 教材と授業での取り組み

教科書は *ELEMENT English Course I* (啓林館) を使用し、昨年度(中3時)同様、chorus reading (new words と text) → 本文説明 → 自作プリントによる演習という流れで進めている。また週に一度、単語(11)と基本文(3)の小テスト(20点満点)を行い、基本事項の暗記を促している。

昨年度と異なる点としては、高校1年生においては、いわゆる重要文法事項が中学時ほどさほど多くないので、(重要なものとしては関係副詞と仮定法のみ) プリント(毎時間1枚配布)の中に、必ずしも授業内容とは関係ない writing 問題(The Japan Times などからの自作や、大学入試問題など)を入れて、適宜演習を行っている。

(例) 絵を英語(30語程度)で描写させるもの



もっと多い語数のものとしては漫画「ドラえもん」(1話分)のあらすじを英語で書かせたりした。

自分の意見を書くもの

「インターネットの長所と短所について 50 語程度で書きなさい。」

「君が代斉唱の際の起立を義務付ける条例についてどう思うか。賛成、反対いずれかの意見とその理由を書きなさい。」

#### 3.4.3 今後の課題

「英語の授業は英語で」という学習指導要領方針に基づき、教科書を扱う際には簡単な英問英答を適宜入れるようにしたが、今後はそれをさらに高い頻度で、また教科書以外の活動でも導入していき、生徒の発話を促していきたいと考えている。

### 3.5 高校1年生オーラルコミュニケーション I (62期) 担当: 須田智之

#### 3.5.1 はじめに

本校では「オーラルコミュニケーション I」(2単位時間)を高校1年生の必修科目として履修させている。週2時間の授業のうち、1時間は LL 教室を使って主にリスニングとスピーキングの基礎力養成を目指し、もう1時間はネイティブ教員とのティームティーチング(TT)による口頭発表力の育成を図っている。

#### 3.5.2 LL 授業での取り組み

LL 授業では教材として1つのコースブックを採用することはせず、適宜様々な教材を用いている。具体的には、英語の歌を題材として歌詞や解説の Dictation、ニュース英語を題材とした音読・シャドーイング練習、インタビューや物語などを聞き取る活動、英語字幕での映画鑑賞と場面を選んで会話練習・スクリプトの読解などを実施して来た。参考資料として活用したものは以下の通りである。

<英語の歌>

*Smash Hit Listening English through Rock & Pop Revised Edition* (MacMillan Language house)

<ニュース英語>

『CNN ニュース・リスニング 2011[春]』(朝日出版)

『CNN ニュース・リスニング 2011[秋冬]』(朝日出版)

<インタビューなど>

『English Journal』(アルク)、インターネットから見つけてきた素材など

<映画>

『カンフー・パンダ』、『スパイダーマン』、『スクールオブロック』、『いまを生きる』

### 3.5.3. 映画の活用法

映画は英語学習にとって身近な教材である。毎時間10～15分程度を使って少しずつ紹介しているが、観賞後の活動（会話練習など）を今後更に充実させたい。高校1年生のレベルでは、英語字幕で観賞し理解可能、かつ題材やストーリーなどが生徒の心にインパクトを与え得る作品を選びたいと考えている。

1学期に観賞した『カンフー・パンダ』はアニメ映画で子供っぽいと思われるかもしれないが、ストーリーの緩急と共に登場人物達の名台詞も多く、生徒達には非常に好評であった。英語字幕と共に台詞もほぼ100%理解可能で、高校1年生に丁度良いレベルの作品であると思う。

### 3.5.4 TTの授業での取り組み

日本人教員とNew Zealand出身のALTによるTTの授業であるが、普通教室を使って41名を相手にしなければならず、「生徒の英語での発話量を如何にして確保するか」が課題である。クラスサイズの都合から授業の流れとしては、ある1つの題材について、ペア（2人組）→グループ（6人）→全体でのシェアリングという形を採ることが多かった。1学期・2学期に扱った内容は以下の通りである。

#### <1学期>

1学期は担当者2名共に62期生を教えるのが初めてだった為、自己紹介のスピーチを最初の題材とした。以下、日本の伝統行事（端午の節句）や校外学習での登山など、身近な題材を取り上げた。

1. 自己紹介スピーチ
2. 日本文化についての紹介 (4 corners)
3. 登山に持って行くもの (Ranking Activity)
4. 校外学習の思い出 (Picture Description)
5. 20 Questions (Asking questions)
5. 100万回生きた猫 (Skit)
6. 英詩("Youth" by Samuel Ullman)の鑑賞
7. 英詩の作成 (Writing Simple Poems)

#### <2学期>

1. 夏の思い出
2. Finish the Story: The French Bullet Train (Decision making)
3. You Can Be the Judge: The New Job (Decision Making)
4. Have You Read a Good Book or seen a Good Movie Lately? (Opinion Exchange)
5. Proverbs and Values (English Values)

6. *Doyo* (Japanese Songs for Children) in English
7. Speech

2学期は *Discussion Starters Speaking Fluency Activities for Advanced ESL/EFL students* (The University of Michigan Press) を適宜使用したが、題材の難易度の調整が今後の課題である。

### 3.5.5 実技（パフォーマンス）テスト

毎学期の最後に実技（パフォーマンス）テストを実施するように心掛けている。1学期は3つの課題①『カンフー・パンダ』の1シーンを演じる（2人組）、②100万回生きた猫のスキット（3人組）、③英詩 Youth の暗唱（4～5人組）からの選択制とし、クラス単位での発表の場を設けた。以下3つの課題の内2つのスクリプトである。

#### ①『カンフー・パンダ』の1シーンを演じる

以下は主人公のパンダPoにラーメン屋の父親が「秘伝のスープ」の秘密を打ち明ける場面。生徒達は小道具なども自主的に用意し楽しそうに演じていた。

Po: I don't know, Dad. Honestly, sometimes I can't believe I'm actually your son.

Father: Oh, Po. I think it's time I told you something I should have told you a long time ago.

Po: OK.

Father: The secret ingredient of my Secret Ingredient Soup.

Po: Oh!

Father: Come here. The secret ingredient is ... nothing.

Po: Ha?

Father: You heard me. Nothing! There is no secret ingredient!

Po: Wait, wait. It's just plain old noodle soup? You don't add some kind of special sauce or something?

Father: Don't have to. To make something special, you just have to believe it's special.

Po: There is no secret ingredient.

#### ③英詩 Youth の暗唱

グループ（4～5人）による暗唱だった為、1人当たりの負担はそれほど多くなかったと思う。アメリカからの留学生 Cole 君も飛び入りで参加し暗唱を披露し

てくれた。

### "YOUTH" by Samuel Ullman

Youth is not a time of life; it is a state of mind; it is not a matter of rosy cheeks, red lips and supple knees; it is a matter of the will, a quality of the imagination, a vigor of the emotions; it is the freshness of the deep springs of life.

Youth means a temperamental predominance of courage over timidity of the appetite, for adventure over the love of ease. This often exists in a man of sixty more than a boy of twenty. Nobody grows old merely by a number of years. We grow old by deserting our ideals.

Years may wrinkle the skin, but to give up enthusiasm wrinkles the soul. Worry, fear, self-distrust bows the heart and turns the spirit back to dust.

Whether sixty or sixteen, there is in every human being's heart the lure of wonder, the unfailing child-like appetite of what's next, and the joy of the game of living. In the center of your heart and my heart there is a wireless station; so long as it receives messages of beauty, hope, cheer, courage and power from men and from the infinite, so long are you young.

When the aeriels are down, and your spirit is covered with snows of cynicism and the ice of pessimism, then you are grown old, even at twenty, but as long as your aeriels are up, to catch the waves of optimism, there is hope you may die young at eighty.

本校の生徒達は、実技テストに向けて練習に取り組んでくれる為、授業内で到達し得るレベルを超えたパフォーマンスが見られるのが楽しみである。2 学期は、残念ながらクラス全員による発表の場を設けられなかったが、幾つかの有志グループによる My Country Home の素晴らしい合唱の披露があった。今後も毎回の授業での Small Steps と学期末の実技テストを効果

的に組み合わせながら授業を展開していきたい。

## 3.6 高校2年生(61期) 担当: 秋元佐恵

### 3.6.1 はじめに(発展期のスタート)

6年間のシラバスのなかで最終段階の「発展期」に入った高校2年は、国内・海外での英語発表の機会も増えてくる学年である。ある程度の語彙と必要な文法を身につけたこの段階では、一般教養として幅広いジャンルの英語に触れながら、ある程度のフォーマリティをもって英語を発する能力が求められるだろう。とくに新年度直前に震災があった今年、高校2年生として自分の思いや意見をふさわしい語彙で述べる機会を増やしたい、と強く思った。

昨年度に引き続き、筆者が英語授業の柱としている「(オーセンティックな)インプット→インテイク→アウトプット」の流れに従い、以下の3つを授業目標とした。

- ①今使われている時事英語をなるべく多く取り入れる。
- ②フォーマリティの高い英語を暗誦させる。
- ③生徒に意見を書かせ、優秀作品から学ばせる。

以下、この目標に関する取り組みを紹介する。

なお、英語Ⅱは4単位で、例年通り1単位をネイティブとのティーム・ティーチングにあて、ディベートやスピーチなどを実施(八宮担当)、残り3単位をテキストを用いた通常授業(秋元担当)とした。まず、通常授業について報告し、その後にTTについて述べる。

### 3.6.2 通常授業での取り組み例

#### 3.6.2.1 ニュース・テストの実施(目標①)

NHKラジオで放送中の『ニュースで英会話』を教材として使っている。この番組はネット上のコンテンツが非常に充実している。NHKワールドで流れたニュース音声、その英文スクリプトと和訳、さらに各センテンスと重要語彙がテスト形式でまとめられている。今年度はLL教室での授業がないため、自宅学習用としてPCで聴くように勧めた。

テストの方法は、1週間のニュースの中で授業者が選んだものを週の終わりに予告し、翌週の初めに語彙や簡単な作文を含めた10分テスト、というものである。これにより、ニュースで使われた時事英語を音声から学ぶことができる。

この教材以外では、週刊STの音声CDを用いて作ったリスニング教材が好評だった。

### 3.6.2.2 名スピーチ暗誦 (目標②)

ティーム・ティーチングの授業ではスピーチをする機会が多いが、通常授業ではその素地づくりとして、内容・英語ともに優れた有名スピーチを暗誦させることとした。今回選んだのは、オバマ大統領勝利演説(2008)、キング牧師の“I have a dream”(1963)、スティーブ・ジョブズの Commencement Address at Stanford University (2005) などである。さらに、優れたスピーチとは何かを考えさせるため、今年度アカデミー賞受賞の映画 *The King's Speech* を鑑賞、そのなかの pre-war speech も暗誦項目に入れた。

生徒は自分の気に入ったスピーチから1分程度の部分を選び、クラスの前で発表する。授業で紹介したもの以外でもよい、と言ったところ、チャップリンの“The Great Dictator”などを暗誦する者もいた。

### 3.6.2.3 意見表明とフィードバック (目標③)

英語Ⅱの授業では、文化祭や校外学習、筑波大訪問など、生徒の心が大きく動いた行事や、大きなニュースにかんして、ある程度の語数でエッセイ・ライティングをさせている。その一例として、夏の課題を紹介する。

「この夏の震災関係のニュースから1つの側面を選んで状況をまとめ、それに対する自分の考えや感想を200語程度の英語で述べよ。(例: エネルギー問題、被災地に関する報道、政府の対応、海外の反応など)」

提出後はフィードバックとして、すぐれた作品をハンドアウトとして渡す。以下はそのうちのひとつ。

#### Honesty or Creativity?

(「瓦礫で見つかった大量の現金が盗まれず届けられたのは、日本人の正直さの象徴」という海外の記事を複数読んで)

According to the Japanese Policy Agency, they've revived \$78 million in missing cash and valuables that citizens have found in the rubble and promptly turned in, after disaster struck on March 11<sup>th</sup>.

The Blaze said, the Japanese people lack the “finders keeper's mentality in their moment of crisis, unlike London where extensively looting took place after the recent riots,” admiring their honesty even in such a disaster situation in contrast with the recent London riots.

I definitely agree with this opinion, and this news makes me feel very proud of being

Japanese. However, my opinion is: Were these behavior really just due to the Japanese honesty? Some foreign people believes Japanese has the highest level of the ethical awareness in the world, and Japan is sort of utopia in this sense. But is it really true?

I think, in reality these honest behaviors came not only from honesty itself but also from our nationality. In other words, people did so because they're enforced to do so. Our nationality (usually developed under our society) is like, to follow the majority, not to break any rules, or to suppress one's feelings in public. One English teacher, who teaches in Japan for 4 years, commented on the BBS about this news, “nothing is more frustrating than the lack of creativity and encouragement of homogeneity,” comparing with U.S., where people value individuality and commonly say rules are made to be broken.

Instead of being honest in our society, we might have lost creativity somewhere. Japan is neither perfect nor utopia. Our generation should realize both advantage of being honest and disadvantage of not creative.

Be honest, be creative. (274 words)

このほか、「陸前高田でのボランティア活動に参加して」「日本のリスクマネジメントについて」「児玉教授の放射能に関する演説について」など、合計6点を紹介。皆で読んだ後、どのような点が優れているか、意見を出してもらった。また、フィードバックの際は、作品紹介とともに、多く見られた文法・語法の誤りを“Common Errors”としてまとめ、指摘している。

生徒の作品は、何よりの優れた教材になりうる。また授業者にとっては、授業で不足している点、これから進むべき方向を明確に示してくれるものでもある。さらに、ひとりひとりの文法発達が見られるという点で、個人指導に役立つ貴重な資料と言える。今後もエッセイ・ライティングとフィードバックは時間の許す限り、続けていきたいと思っている。

### 3.6.3 ITでの取り組み (担当: 八宮孝夫)

#### 3.6.3.1 はじめに

高校2年生の4単位中の1単位で、ALTとのティーム・ティーチングにより、ディベートやディスカッション

ョンを行うというのが筆者の担当である。

### 3.6.3.2 1学期の授業

筆者は、これまで3単位の授業は数回経験しているが、ディベート・ディスカッションの授業は初めての経験で、手探りの状態であった。そこで、生徒の口頭発表能力を見ることも兼ねて自己紹介をおこなった。

5月にはディベートの基本概念を導入するために *Discover Debate*(2000) を一部利用した。例えば、Opinion of value, policy, fact, Debate terms, Explaining your opinion, Strong reasons, Resolutions などである。

6月には「校外学習で訪れた吉野・奈良・京都はどこが一番お勧めか」、をテーマにグループ発表を行った。残念ながら、それぞれが自分のフィールドワークに忙しく、あまり吉野や奈良を見ていないことが判明。それぞれの良さをアピールするポイントが、似通ったものになってしまった。

6月の後半はディベートを行うことにしたが、5人対5人のディベートだと、グループ中で発言をする生徒と、しない生徒で別れてしまう可能性もあり、どのようにしようか迷っていた。そのような時に、ディベート実戦で実績のある浜野清澄先生（さいたま市立浦和高等学校）のディベート練習を拝見する機会があった。浜野先生によればディベートの基本は1対1ディベートで、その流れは以下のものであった：

- 1) テーマを与えて1分間考えさせる。
- 2) 肯定側が1分意見を述べ、否定側はメモを取り内容を聞き取る。
- 3) 否定側が内容に対して質問や反論を行う。肯定側はそれに答える。
- 4) 今度は否定側が意見を述べ、肯定側がメモを取りながら聞く。
- 5) 肯定側が内容に対して質問や反論を行う。否定側はそれに答える。(以下、これを繰り返す)

ディベートというと、意見を言う方ばかりに意識が行きがちであるが、同じくらい重要なのは相手の意見を聞きそれを確認し、反論すること (You said ..., but I think ...) だという。そこで、最後のディベートは1対1にし、その練習を事前に行った。テーマは「男女別学と共学ではどちらがよいか」である。本番では、賛成・反対のペアに4分ほどの間、上記のような流れでディベートをさせ、評価の目安は発音・視線など5点、内容面 (2 reasons, 2 examples) 7点、相手の内容のメモ・反論 3点、の合計 15点とした。

### 3.6.3.3 2学期の授業

2学期は、まずディベートからは少しずれるが、プレゼンテーションをさせることにした。通常こちらがよく知っているものを教材にしがちであるが、今回はこちらにほとんど知識がなく、生徒の側は相当詳しいであろう、ということ課題にした：

「コミックの *One Piece* の内容と登場人物、その人物関係を説明せよ」、というものである。具体的には10グループに分け、*One Piece* の冒険のきっかけ・全体のあらすじ、登場人物の関係、主要登場人物7名の説明、をグループごとに担当してもらい、最後のグループには *One Piece* 以外のお勧め作品を説明してもらった。

*One Piece* のプレゼンテーションは、グループによっては劇のようにして紹介するなど熱演もあったのであるが、一方で、調べたことを単に読み上げる、というものもあった。やはり、原稿になるべく頼らず、聴衆に視線を向けて発表させたいということで、次のテーマは話し易いものにした。

Small talk である。日常的なテーマを取り上げ、5分考えさせ、ペアの生徒とお互いの話をする。ペアを替え3回繰り返し、自分の話について fluency も高まったところで、前に出て発表。慣れてくると1時間内にほとんど全員が発表できた。

1回目は“Are you a morning person or a night person?”

2回目は“My weak points”

3回目は“If I had a teleport [or time] machine”

4回目に、それまでの3つのうち一番話しやすかったテーマについて再度前で話をさせ、それを評価の対象にした。

最後は、今学期も1対1ディベートで、テーマは生徒から募ったものから選んだ：

“Using nuclear energy is good or not”

通常授業担当者 (秋元) でも夏の課題で一部扱った内容であり、ある程度のフォーマリティをもって時事的な話題について英語で語る、という目標にも合致した。

賛成と反対の例を挙げる。

I am for the use of nuclear power.

One reason is that it doesn't emit green house gas nor harmful gas. Thermal power generation emits 887g of CO<sub>2</sub> to produce 1 kwh electricity. It is one of the biggest causes of global warming. It also emit nitrogen oxide and sulfur oxide, which is factor

in acid rain, while nuclear doesn't emit such gas. But for nuclear power in Japan, to make the same amount of electricity by thermal power, you would have to emit about 5 million kg of extra CO<sub>2</sub>.

One more reason is that fossil fuels may be exhausted shortly, and that we need an alternative source. The estimate of British Petroleum shows that petroleum will last for only 41 years, natural gas for 67 years. Nuclear power produces much energy from a little material and the material is fairly widespread around the world.

(2-2 K)

I am against the use of nuclear power.

First reason is, of course, it's risk. Obviously, the risk of nuclear power plants is too high, you know, radioactive chemicals do harm to almost all parts of nature in long time. If the accidents happen in power plants, like March 11<sup>th</sup>, they make their surroundings contaminated. And we have to keep away from the large area around the power plants. Then, can we cut all accidents off? I think the answer is "No." whatever happens, we couldn't avoid them.

But you will say the nuclear power plant make less CO<sub>2</sub>. It's true, but nuclear power plants make radioactive waste. It takes long time and large place. This is second reason. I think, on the earth, there are so many energy available that we can use it almost limitless like wind power or water power and so on. We should think again what to use and not to use.

(2-3 H)

### 3.6.3.4 今後の課題

1 学期、2 学期と 1 対 1 デイバートを試みてきた。全員の生徒が等しく 2 分近く発言する点で評価しやすいのであるが、テーマが共通のために、どうしても論理展開、意見の根拠となる理由なども似通ってしまう。デイバートにつきものの白熱感は正直あまりない。

3 学期は、個々の生徒に話す機会を与えながらバリエーションもあるような課題を考えたい。

## 3.7 高校 2 年ゼミナール(年間 7 回・土曜日)

担当：秋元佐恵

### 3.7.1 ゼミナールの内容と目標

今年度の高 2 ゼミナールでは、日本学術振興会による「サイエンス・ダイアログ」のプログラムに参加している。本校では昨年度中学 3 年テーマ研究に続いての参加となる。毎回のスピーカーは、日本の大学機関で研究中の若手研究者で、ノンネイティブであることが多い。ゼミナール受講生徒は、同時開講している中 3 テーマ研究と合わせると、年間最大 10 回の講演を聞くことができる。

現在までのスピーカーは以下のとおり。

第 1 回	Cultural Diversity	Dr. Seung-Hoon Heo
第 2 回	Hydrology	Dr. Craig Ferguson
第 3 回	Nanotechnology	Dr. Mathew Kallumadil
第 4 回	Radiosurgery	Dr. Mikhail Chernov
第 5 回	Dentistry	Dr. Lynett Danks

なお、今回サイエンス・ダイアログをゼミナールに導入した目的は、以下の 3 つである。

- ①様々な国の様々な分野（文理問わず）の若手研究者と接し、視野を広げる。
- ②自分たちにとって身近なノンネイティブの英語を聞くことにより、プレゼン技術を学びながら、英語発信能力を高める。
- ③自分の興味ある講演内容の分野を、来年度の高 3 テーマ研究（卒業研究）へと深める。

### 3.7.2 検証と今後の課題

現在（2 学期終了時点）、上記の目標①②は達成できている。受講者にとって 100 分ほどの専門的な英語を聞き取ることは、困難であるが、大いに訓練となっている。普通の授業では教材として用いることの少ない「ノンネイティブの英語」がどのようなものか、また相手に伝わりやすい効果的なプレゼンとはどのようなものか、受講者たちは毎回学んでいるようだ。講演最後の質疑応答でも、回数が進むにつれて発言する人数が増えてきた。

しかしながら、目標③は当初の予想に反し、達成困難であることがわかった。各研究者の講演内容は博士課程を経た専門的なものであるため、高校生が自分なりに研究して成果を出す卒業研究には、なかなか結びつくものではない。

すでに 2 回の講演を終えた 1 学期終了時点でこのことが明らかになったため、卒業研究対策として、担当者が専門としている「コーパス言語学」「認知言語学」を紹介し、サブゼミとして特別時間割や夏休み中の時間を使って、希望者に開講することとした。また、英

語で論文を書きたいという受講者のために、3 学期にアカデミック・ライティングの講座も開く予定である。

以上のように、当初の計画よりずいぶんと拡張した内容のゼミとなったが、人数も 32 名と多いので、各自が自分の興味の方向を生かしながら、英語という言語への興味を深めてもらえれば、と考えている。

### 3.8 高校3年生：リーディング (60 期)

担当：高橋深美

#### 3.8.1 はじめに (発展期の完成)

高校3年生のリーディングは2年次の英語Ⅱの流れを引き継ぐ。この論集の締め切りが毎年11月であるため、昨年度の英語Ⅱにおいて行った12月以降の取り組みのうち、自然科学の分野に関連したものを先に述べることにする。

#### 3.8.2 英語Ⅱにおける昨年度後半の取り組み

昨年度の2学期はクローン、遺伝子組み換え等を扱ったので、以後の授業でそれを発展させる形で、臓器移植、ヒト遺伝子組み換えの論理等を扱った。

臓器移植(organ transplantation)は倫理的な問題、法整備上の問題と不可分の分野であり、関連事項を広げていくとそれだけでいくら時間があっても足りないところであるが、授業では、臓器を移植することとそれを巡る社会情勢の一側面を英文で読むこととし、日本の臓器移植に関する法整備は別に示した。

また、ヒト遺伝子組み換えの論理については、Michael Sandel の *The Case against Perfection* (邦訳「完全な人間を目指さなくてよい論理」) および他の文章を参照して、読解と作文の教材を作成した。ヒトゲノムが解読され、ヒト遺伝子の組み換えが技術的に可能となった現在、旧来の優生学(eugenics)における議論を跡づけることもまた必要になったと言えるだろう。

和文英訳の例として以下のようなものを挙げる。

#### EUGENICS AND GENETIC MODIFICATION

Put into English

- ①あなたの配偶者は、大変知的能力が高くなる遺伝子を持っているが、あなたはそれを持っていないとします。
- ②普通の受精ではあなたたちの子に、あなたの配偶者の潜在能力が遺伝する可能性は50%です。

③しかし、受精前にあなたの生殖細胞の遺伝子の一部を、あなたの配偶者のものと組み換えれば、配偶者の潜在能力は確実にあなたたちの子に遺伝します。

④遺伝子の組み換えには多額の費用がかかりますが、誕生してくる子に対しての安全は保証されています。

この和文英訳については、言語材料は読解の教材を通じて提供していたため、生徒は、概ね日本語の意味を伝える英文を書いていた。これを踏まえて、定期考査においてほぼこれと同一の状況を再提示し、次のような書き出しに続く自由作文を出題した。

If I were in this case, I would wish / not wish to have my gene(s) modified because...

生徒の答えはバラエティに富んでいたが、例えば、No, I wouldn't. (中略) Success should be made by sweat and tears. (S.U.)

のようなものがあった。また論理的に自分の主張を展開した生徒もあり、時間的制約のある定期考査ではなく、提出課題とした方が適切であった。

#### 3.8.3 高校3年生リーディング

高校3年生の授業については、多様なジャンルの英文を読むことと聞き取ることを主軸に授業を展開している。

読解教材としては、例えば以下のようなものを取り上げた。

- ・言語の進化
- ・環境保護
- ・笑いの効用
- ・動物のテリトリーについて
- ・個人の人権が制約される条件

またリスニングについては、高校3年生になると日常会話を聞き取れてもあまり達成感がないようで、中身のある英語のリスニングが適しているようである。

例として、ある大学で出題されたリスニング問題のあらすじを紹介する。

Some monkeys are in the cage, where water is sprayed when the monkeys climb up the stairs to get bananas. Soon the monkeys learn they should not climb the stairs and begin to attack if any of them do that. Then the monkeys are replaced in turn, and the spray is removed. But a newcomer is

attacked by the other monkeys when it tries to climb the stairs to get bananas. When there are no monkeys which know why they should not climb the stairs, newcomers are still attacked when they climb the stairs, and the monkeys once attacked join attacking the newcomers. In this way, rules are formed in society where nobody knows why the rules exist.

このくらいの内容になると英語を1回聞いただけで理解するのは容易ではないが、理解できると達成感が得られるようである

### 3.9 高校3年生：ライティング (60期)

担当：須田智之、平原麻子

#### 3.9.1 ライティング授業の概要

本校では高校3年生の選択科目「ライティング」(2単位時間)を2名の教員が担当し、1時間を文法・構文指導中心の授業、もう1時間をパラグラフ・エッセイライティング指導中心の授業と位置づけて指導を展開している。授業は各教員によるハンドアウトを中心に進め、*CROWN English Writing New Edition* (三省堂)を補助的に活用した。

#### 3.9.2. パラグラフ・エッセイライティング指導

パラグラフ・エッセイライティング指導の1時間は、以下の4つを柱として授業を展開した。

##### ①English Journal(生徒各自によるJournal Writing)

B5サイズのノートを使用し、好きなテーマで英文を書き綴ってもらった。自己紹介、人物紹介、My Comfortable Placeなど身近な題材を主に扱った。生徒それぞれの興味関心について知ることができ、教師の立場としては大変興味深い実践となった。

##### ②Paragraph writing

英文の Paragraph の構成 (Topic sentence, Supporting sentences, Concluding sentence など)を確認すると共に、段落内の文章を正しい順番に並べ替えら訓練などを実施した、その後、入試問題など 1 Paragraph での演習問題に取り組んだ。

##### ③Essay Writing

英文 Essay の構造 (Introduction, Body, Conclusion) などを確認すると共に、各自の選んだテーマについて約500語の Essay Writing に取り組んでもらった。今年度は実施出来なかったが、①外部のコンテストへの応募なども視野に入れて指導する、②最終的には Essay を冊子にまとめる、などすると良いの

ではないかと思う。

#### ④ESSC 2011

Creative Writing を扱う予定は年度初めの計画に無かったが、ESSC (Extremely Short Story Competition) という、50語ぴったりで英詩などの作品を作るという学習者向けのコンテストに作品を応募させることにした。「50語ぴったりでなければいけない」という制約や普段から書き慣れていない形式の為難しかった様ではあったが、それぞれが個性豊かな作品に仕上がったと思う。以下はある生徒の応募作品例である。

##### Chest

Chest, breast, bosom, bust...

Why are there so many words which mean the same part of our bodies?

Someone may say "That's because men like them." but I do not agree.

Our chests are our hearts.

Maybe the reason is that we want to describe our love in various ways.

##### Computer

Every morning I say "Good morning!" to people all over the world.

The answers are often "Good evening!"

Then I know that the world is full of my friends. We are doing and thinking differently, in the same planet.

And most importantly, we can connect anyone with this great machine!

#### 3.9.3 今後の課題

週1時間という限られた時間の中で、可能な限り沢山の例を示すと共に、英文を沢山書かせる必要性を改めて実感した。また、その際には難解な語彙や文構造を避け、読み手が分かり易い英文を書くように指導する事が大切であると思った。今後も様々な資料などを収集し Writing 指導に活用していきたい。

## 4 国際交流を支援する取り組み

### 4.1 はじめに

本稿冒頭で述べられているように、ここ数年で本校生徒が海外の人々と交流する機会が飛躍的に増えてきた。交流の目的は文化交流の場合もあるが、科学的な内容の研究交流が主流であるところが本校の特徴といえる。英語科では、日常的な授業の中でプレゼンテーション能力を鍛える指導を行っているが、生徒が研究交流の場で十分な成果をあげるためには、さらに授業外での支援が必要となってくる。

以下に、昨年度から今年度にかけて英語科として行った国際交流支援活動について述べる。

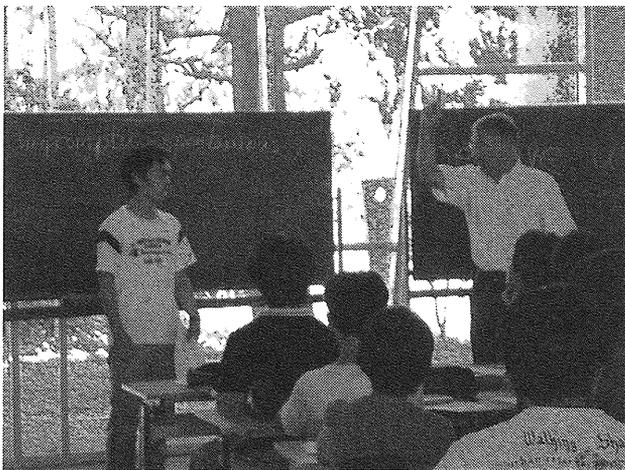
### 4.2 研究交流における英語科の支援活動

#### 4.2.1 プレゼンテーション・スキル・ワークショップ

サイエンス・コミュニケーション・スペシャリストとして活躍中の Mr. & Mrs. Vierheller 氏を招き、希望者を対象とした英語での効果的なプレゼンテーション・スキルについて学ぶワークショップを第 1 学期期末考査後に開催した。

“Learn to Present”と題された本講座には中 1 から高 3 まで約 60 名の生徒が参加し、異学年集団を形成してグループごとの発表活動に取り組んだ。指導の中心は聴衆を引き付けるためのさまざまなスキルであった。具体的にはスピーチをする際の声の強弱、イントネーション、アイコンタクト、身振りなどについて、実際にグループで発表をしながら指導して頂いた。

2 時間ほどのまとまった時間で達成感を得ることができ、普段の授業ではなかなかできない取り組みである。今後も継続していきたい。



Mr. Vierheller の指導風景

#### 4.2.2 台湾国立台中第一高級中学(台中一中)との研究交流へのサポート

台中一中との研究交流活動は今年度で 3 年目を迎える。これは生徒同士が各自のテーマに沿って行った研究を学会形式で発表しあうという本格的なもので、過去の発表テーマの一例をあげると、以下のようなものがある。

- ・ The Study of Liquid Crystal
- ・ An Analysis of Glom Protein
- ・ An Introduction to Corpus Linguistics etc.

このように高度に専門的な内容を効果的に発表するためには、事前の発表原稿作成のみならず、見やすいパワーポイントの作成・発表手順の確認・発話の抑揚やスピードの確認、など準備しておくべきことが数多くある。

これらをカバーするために英語科は過去 2 年間、渡航直前の丸一日をさいて本番と同じ形の研究発表リハーサル会を開き、声の大きさや目線、パワーポイントの内容など細かなところまで点検し、気がついた点を様々アドバイスしてきた。それをもとに生徒たちは、移動の飛行機やバスの中、またホテルでも台中一中訪問の直前まで何度も何度も繰り返し発表内容の練習を重ね、本番では堂々と台湾の生徒たちと渡り合い、研究成果を分かち合った。この経験を積んだ生徒たちは、そこから広い視野と大きな自信を得、その後もさらに積極的に国際交流に取り組むようになっていくものである。

今年度の渡航前研修では、よりプレゼン技術を強化するために、前項で触れた Vierheller 夫妻をお招きしてリハーサルを行った。

まず、午前中から午後 2 時までに、今年度発表の全グループに規定の 20 分づつ発表をしてもらい、英語科で国際交流プロジェクトに関わっている教員および発表テーマ担当の理科教員から気づいたことを指摘していった（発表した以外のグループからも意見を募った）。このように、1 度内容を総ざらいしたところで、Vierheller 夫妻の登場である。

各グループに 5 分ほど発表してもらい、主にプレゼンテーションで気になったことを指摘していただく予定であった。実際には作成したパワーポイントに提示すべきもの、口頭発表に回した方がいいもの、プレゼンに適した語彙（例えば、aim より objective の方がよい）など非常に微に入り細に入った指導をしていただいた。

今後も有益なアドバイスを挙げておく：

#### ①First tell, second show

まず、口頭で述べてから絵やグラフを提示すべし。  
はじめに情報を提示してしまうと、相手は聞かなくなる。

#### ②Repeat important things

大切なことは繰り返すべし。

#### ③Short message in large prints

パワーポイントで提示する文字は最小限に。また大きな文字で示すべし。

#### ④Get the audience involved

質問をしたり、ポイントを繰り返させたりして聴衆を巻き込むべし。

#### ⑤50% read, 50% look up

視線を上げるべし。

#### ⑥Gestures change voice

ジェスチャーは声のトーンをコントロールするのに役立つと心得るべし

#### ⑦Backward chaining

練習は結論部から、序論のほうに戻るようにすべし。

#### ⑧Nervous crushing: Stop-Breathe-Think-Act

緊張したら、まず立ち止まり、深呼吸をし、よく考え、行動すべし。

最後に聴衆を引き付けるための6つの心得を示された。参考までに以下に挙げる：

- 1) Rhetorical questions
- 2) Silence
- 3) Call and answer
- 4) Humour
- 5) Shocking Statement
- 6) Anecdote / Analogy

### 4.2.3 シンガポール1週間研修 (SSH)

シンガポールのNUS High Schoolに高校1年生の生徒(1名)が参加した。立命館高校のコアSSH事業に招かれる形での派遣であった為、少々肩身の狭い思いをしたかもしれないが、立命館高校の生徒達ともすぐに打ち解け、NUSHSの生徒達とも英語で積極的にコミュニケーションを取るなど、精神的に1回り成長出来る機会になったようである。

理科系の国立大学の附属校ということで、学校の設備なども非常に充実しており、広くてきれいであった。また、在校生は1年間を必ず過ごすという学校の寄宿舎に滞在しながら、授業への見学・参加、周辺の博物館・動物園・自然保護区への見学、NUSHS生徒宅でのホームステイなど、非常に充実した異文化体験が出

来た。

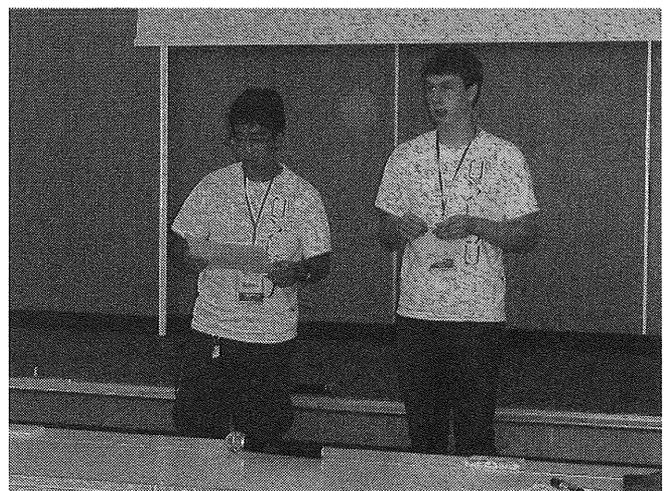
### 4.2.4 東芝地球未来会議への参加

東芝国際交流財団が3年前から行っているもので、今年度はタイで開催された。前半3日間はバンコクから北東200キロのチョクチャイ農場、後半3日は100キロほどバンコクよりのシリンドン・サイエンス・ホームに滞在。

チョクチャイ農場は、野菜・果物などの栽培、家畜の飼育を行っており、レストランも経営、全体が自給自足可能なシステムになっている。

サイエンス・ホームは大学構内の一角にある。2つの対照的な環境を体験し、日本・タイ・米国・ポーランド各2校4名ずつの生徒・その教員とが環境問題やそれぞれの国の文化について話し合い、交流を深めた。本校からは高2の2名が参加、自信をつけた模様。引率した教員にとっても貴重な体験となった。

教員としての支援は、出発前に発表原稿をチェックし表現などの変更の相談にのったこと、参加中は生徒のグループ・ディスカッションに加わったこと、他国の教員との意見交換にて知見を広めたこと、の3点である。



東芝地球未来会議にて

### 4.3 今後の課題

今回の支援は、Vierheller 夫妻に頼った部分が大きかった。フォーマルなプレゼンテーションについて十分な経験のない我達日本人英語教師にとっても、非常に勉強になる点が多かった。このような支援の経験を通して、徐々にネイティブのコミュニケーション・コーチの助けから脱却して、最終的には我達自身で生徒

を支援していくことが大切だと思う。そのためにも、プレゼンテーション・スキル・ワークショップのようなものはよく記録に残して、英語科教員の共有する知識にしていくことが必要である。

## 5 全体のまとめ

本稿では、例年とは異なり、ただ各学年の実践報告ばかりでなく、英語科としての国際交流における支援活動についても述べてきた。「はじめに」でも触れたように、ここ数年、SSH などの関連で生徒が実際に英語でコミュニケーションを取る機会が増えてきたことにより、英語科としての取り組みにも変化が見えてきたためである。

国際交流の機会が増える以前から、英語科としては「コミュニケーションのための英語」の視点は持っており、各学期の評価にも必ず口頭発表などを加えるようにしてきた。

しかし、ここ数年、他国の生徒と研究発表などの交流をすることにより、実際に必要なスキルはどのようなものかが、参加生徒にも引率した英語科教員にも実感を持って認識できるようになった、という点が大きな変化である。すなわち：

- ・相手にわかるように話す工夫をする。
- ・相手の言うことを聞き取る努力をする。
- ・聞いたことに対して、あまり時間をおかずにリアクション(確認、質問、意見を述べるなど)をする。

当たり前、といえば当たり前すぎる事柄である。しかし、これらのことを「実感を持って」認識したということが重要なのである。

国際交流を経験した生徒は明らかにこれらのことを意識して、口頭発表や、通常の授業ですら取り組むようになる。自分で何とかコミュニケーションを取ったという自信と、相手と更に深く議論するためにはまだまだ不十分という実感からであろう。

国際交流の機会が増えたとはいえ、それを直接体験する生徒は限られている。それ以外の生徒にも、(間接的であっても)如何にその体験をさせていくか、が英語教師の課題である。そこにいる生徒全員を「英語でコミュニケーションを取ろう」という意識に高められたなら、日本人同士のコミュニケーション活動であっても、それは立派な直接体験となりうるからである。

## 【参考文献】

- Adelson-Goldstein, Jayme (1991) *Listen First* (Oxford University Press)
- CNN English Express 編(2011)『CNN ニュース・リスニング 2011[春]』(朝日出版)
- (2011)『CNN ニュース・リスニング 2011[秋冬]』(朝日出版)
- Folse, Keith S.(1996) *Discussion Starters Speaking Fluency Activities for Advanced ESL/EFL students* (The University of Michigan Press)
- 八宮孝夫(2011)「私家版」中高6年間のカリキュラム『筑波大学附属駒場論集』第50集
- 平原麻子他(2010)「国際社会で発信する能力の育成(3)」『筑波大学附属駒場論集』第49集
- 金子詔一『「くちぐせ音ペン」用DVD』(地球人村)
- Kumai, Nobuhiko et al. (2010) *Smash Hit Listening English through Rock & Pop Revised Edition* (MacMillan Language house)
- Lubetsky, Michael., et al. (2000) *DISCOVER DEBATE*, Language Solutions Inc.
- Molinsky, Steven J. (2002) *SIDE by SIDE Book 3 (3rd edition)*, Pearson Longman
- (2003) *SIDE by SIDE Book 4 (3rd edition)*, Pearson Longman
- 文科省編『英語ノート』小学5年生用・6年生用
- Northcott, Richard (2010) *Incredible Earth* (CD付き : Oxford Read and Discover Series) (OUP)
- Richards, Jack C. (2003) *Basic Tactics for Listening* (OUP)
- (2003) *Developing Tactics for Listening* (OUP)
- Sandel, Michael (2009) *The Case against Perfection*
- 関口敏行 (2011)『ゼロからスタート英語発音猛特訓』(Jリサーチ出版)
- 高橋一幸 (2005)『チャンツでノリノリ英語楽習』(NHK 出版)
- 山田忠弘他(2011)「国際社会で発信する能力の育成(4)」『筑波大学附属駒場論集』第50集
- 他に語学講座として
- NHK ラジオ『基礎英語 1』、『基礎英語 2』、『ニュースで英会話』(NHK 出版)
- 週刊誌として
- 『週刊 ST』(ジャパントイムス社)
- 月刊誌として
- 『English Journal』(アルク)

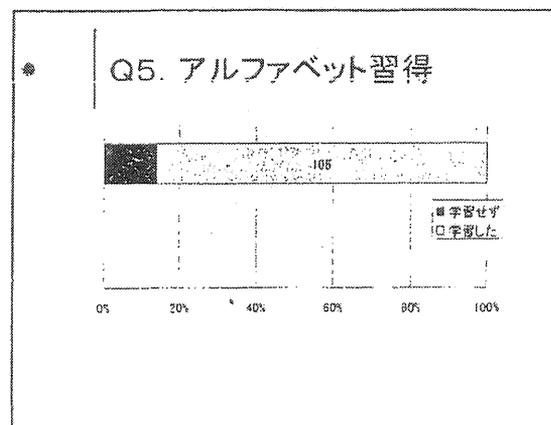
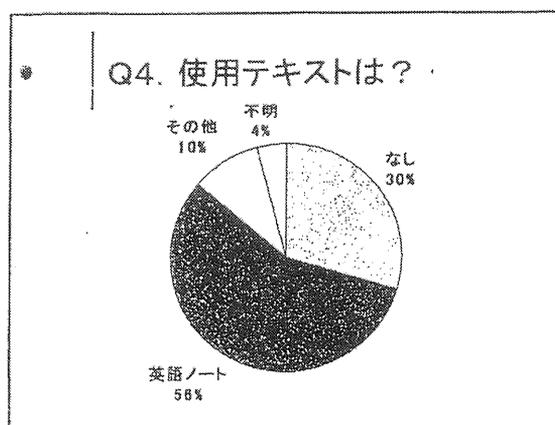
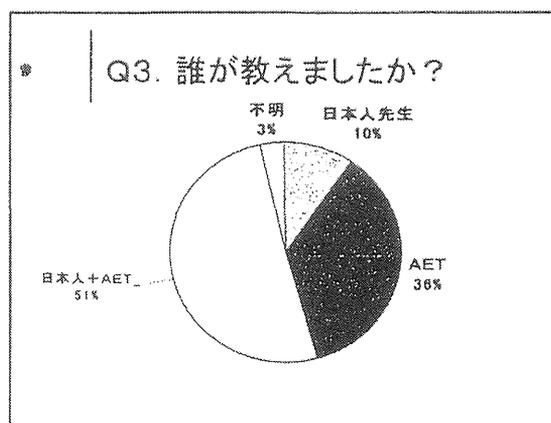
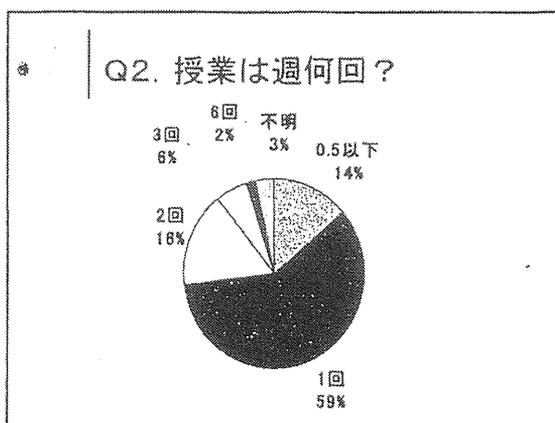
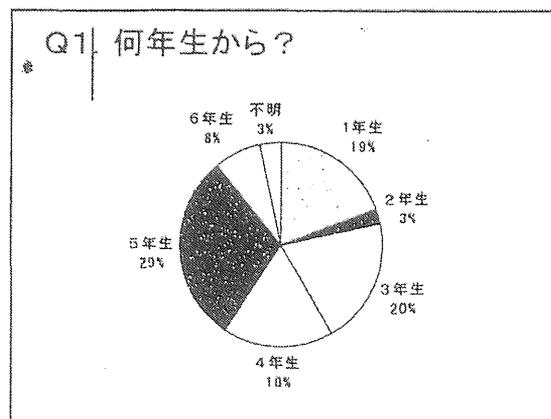
補足資料1 65 期中 1 生の小学校での英語教育アンケート  
 (実施者：八宮、グラフ作成：秋元)

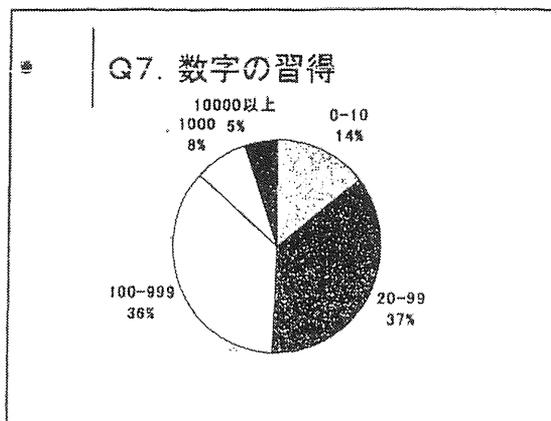
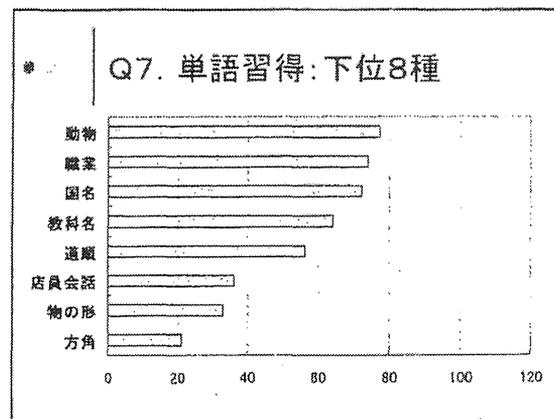
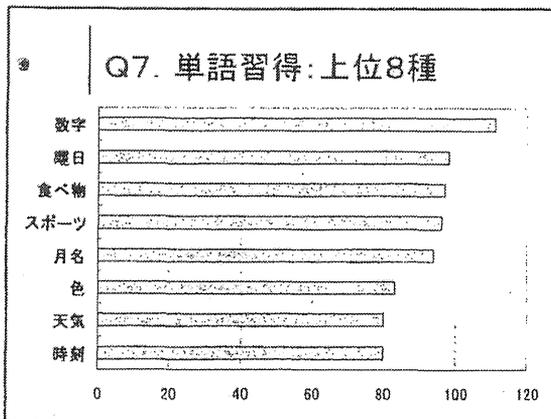
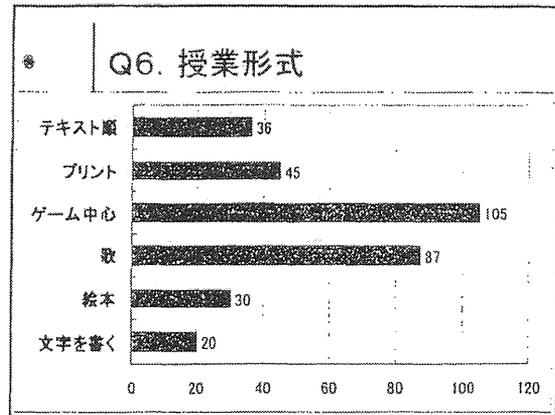
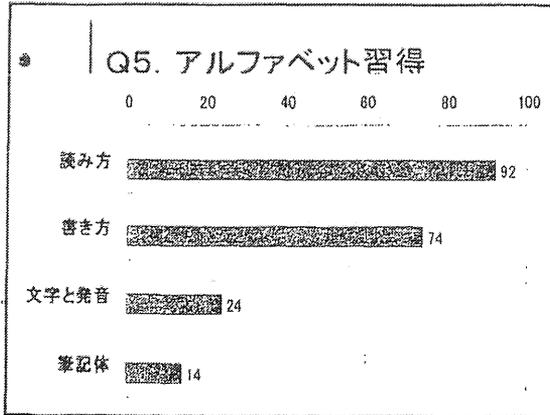
● 中1英語アンケートについて

実施日：2011年4月第3週  
 実施者：八宮孝夫(本校英語教諭中1担当)

対象：本校中学校1年生全員  
 (3クラス、122名)

内容：(1) 小学校での実施年、回数、  
 (2) 使用テキスト、授業形態  
 (3) 文字習得、語彙習得、

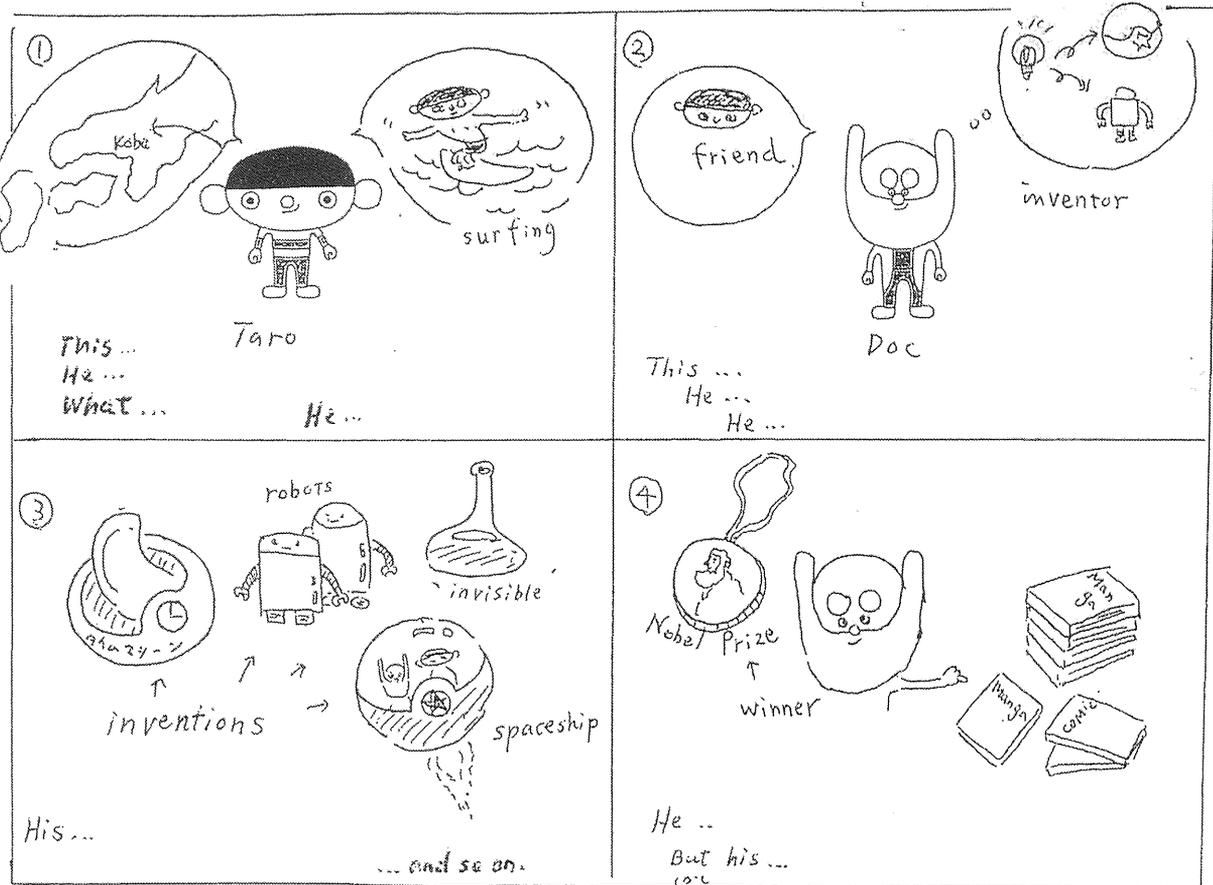




- ### Q8. 印象に残った授業は？
- ゲーム(39)  
「ビンゴ」「国旗」
  - 自己表現(7)
  - 会話(5)
  - 英語劇(4)
  - 英語絵本(4)
  - 歌(3)

補足資料2 65 期中1生、1学期の発表で使用した英文およびイラスト

イラストを見て、英語で言ってみよう(2)



(ペアになって、話し手は文字を隠し、イラストを説明しよう。)

*This is Taro. He is from Kobe.*

*What is his hobby? His hobby is surfing.*

*This is Doc. He is Taro's friend.*

*He is an inventor.*

*His inventions are a time machine, robots, a spaceship  
an "invisible man" drink, and so on..*

*Doc is a winner of the Nobel Prize.*

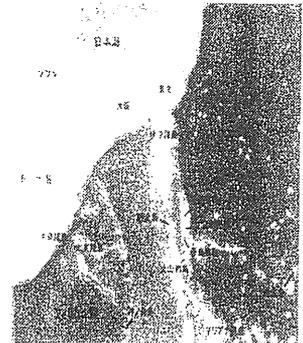
*But his favorite books are manga!*

## Incredible place—In Japan—



### Where are those islands?

They are Ogasawara Islands. There are a lots of very beautiful places there. Where are Ogasawara Islands? They are in the Pacific ocean, and in the Tokyo prefecture, but very far from center of Tokyo.



### Why are Ogasawara Islands incredible?

Nature of Ogasawara Islands is very nice. Many species listed as rare by IUCN (the International Union for Conservation of Nature) live there, since the islands are small, and very far from other lands. Look at the right photo. This is one of rare species in the Ogasawara Islands, Apalopteron familiare.



### Ogasawara Islands named World Natural Heritage site.

On May 7, Ogasawara Islands named World Natural Heritage site for their unique wildlife. Many people will visit there from now on. They will make people in Ogasawara rich, however, trash they throw away will destroy the nature there. We must think and do something to preserve it.

